

Weekly Survey

日本が戦争を経て経済大国になるにいたるまで在位した天皇の崩御に際し、*TIME*は、移り変わる日本社会の文化的支えとして天皇制は存続するだろう、という視点を示す。ほかに、化学兵器をめぐって緊張する米国とリビアの関係、中国の反アフリカ人の動きをみる。

中嶋嶺雄

天皇崩御特集にみる *TIME* の視点

天皇崩御という同時代史の重要な結節点を *TIME* はどのように報ずるのだろうか。そんな関心から今週号を手にしたのだが、まさにエキサイティングな内容だということができる。そこで今回はひとつずつ順を追って見てみよう。

まず表紙がほかのどのメディアの追従も許さないほどに印象的だ。お召し列車に立つ天皇の写真を黒色を用いて弔意を表し、菊の御紋章と同じく *TIME* のロゴを金色にして、そこに THE SHOWA EMPEROR HIROHITO 1901-1989 と黒地に白ぬきで書いてある。この表紙と、カバーストーリーのひとつ “The Showa Era” (pp. 6-7) に添えられた皇居の美しい写真だけでも今週号の *TIME* は保存に値するといわねばなるまい。

巻頭の From the Publisher (p.3) には、1945年5月、つまり終戦の年の *TIME* が掲げた天皇の表紙も載っている。毎号この欄を書いている *TIME* の取締役副社長の R. L. ミラー氏によれば、1928年(昭和3年)の天皇即位式に際して最初にカバーストーリーに登場して以来、天皇

が8回も表紙になっているとのことであり、Peace and war, then peace again というこの欄の言葉が亡き天皇に対する *TIME* の基本的な姿勢を示しているといえよう。

さて、W. E. スミス記者によるカバーストーリーであるが、昨秋の天皇の重体以来の日本国民の懸念や、自粛(self-restraint)ムードのなかの天皇崩御を淡々と伝えながらも、日本が天皇制を保持していることに好感を示している。多くの欧米人には、現代的な産業の世界を支配する日本が天皇制という古めかしい制度を護持していることが逆説的なことのように感じられようが、天皇は変転する社会の「文化的な錨(支え)」(the cultural anchor of a society in the midst of change)

であるがゆえに、天皇制は今後も継承されてゆくだろうと見ている。天皇制が日本社会に根を下ろしている重要な源泉を突いているといわねばなるまい。

Special Report 欄の “From God to Man” (pp. 8-10) は、天皇の生涯を外国人の立場から綴っている。やや外国人趣味の強いタッチではあるけれど、87歳で死んだヒロヒトの生涯は、「物静かで不可思議な古い墨絵」(still and enigmatic as a classical *sumi-e* ink





painting) のような雰囲気を残したという見方も射ているといえよう。

次の Special Report の記事は“A Shy Prince Enters History” (pp. 11-12) と題されており、まだ未知の暗号のような存在だと明仁新天皇を紹介している。

天皇崩御特集の最後は、E.O. ライシャワー元駐日大使のエッセー“The Greatest Monarch” (p. 13) であり、「天皇は日本でかつてなかったもっとも長く在位した君主であるばかりか、もっとも偉大な君主であることを証明するかもしれない」と、この米国きっての知日家は結んでいる。

このように *TIME* は、総じて亡き天皇と天皇制に温かい目を注いでいる。第二次大戦中の敵国であった米国の代表的な雑誌の論調がこのようなものであることを、わたしたち日本人は喜ぶべきであろうが、そのことは同時に、20世紀現代史の大きなうねりと転換を改めて感じさせずにはおかない。日本人は現在そして将来も、天皇と天皇制を単に日本社会の問題としてのみならず、国際社会の問題としても語り得るような視点を持つべきであろう。今回の一連の天皇報道でもっとも欠落していたのは、この点ではなかったか。

わたしの友人の日本の代表的な国際政治学者は、天皇崩御の報と同時に皇居前で必ず一部の皇国主義者が切腹するだろうと外国人カメラマンはその瞬間を待ちかまえており、それが世界に報じられていっせいに「日本たたき」が起こるのではないかと懸念していた。幸いにしてそのようなことは起こらず、総じて日本国民は冷静であったし、*TIME* のカバーストーリーが“Buddhist monks walked their rounds, sounding a slow cadence on drums.” (p. 7) と伝えているように、皇居前には鼓を打つ仏僧の姿が目立っただけであることをわたし自身も確認した。しかし、*TIME* のよ

うな論調だけが世界の世論ではないであろうし、また亡き天皇のお人柄が日本のイメージをおおいに救済してきたことを忘れてはなるまい。

高まる米国とリビアの緊張

ところで、今週号にはふたつの注目すべき国際ニュースが解説されている。そのひとつは、去る1月4日に地中海で起った米軍のF-14 戦闘機によるリビア軍ミグ23戦闘機2機の撃墜事件である(“Chemical Reaction” [pp. 18-21])。この事件は、リビアの化学兵器生産を懸念する米政府がリビアと緊張を高めているさなかに起こり、米ソ関係を中心に国際緊張が大きく緩和しつつあるなかで生じたという意味で二重に衝撃的であった。

同時にこの1月7日からパリで開幕した化学兵器禁止に関する国際会議(140カ国が参加)の直前に起こった事件であったことが大きな意味を含んでいた。*TIME* の論調は、レーガン政権の力の政策がブッシュ次期政権に引き継がれて問題が拡大することに懸念を表明している。

中国でアフリカ人留学生追放デモ

もうひとつのニュースは、昨年末から北京で生じている中国人学生とアフリカ人留学生のトラブルである(“Amity in Peril.” [pp. 14-15])。すでに報じられているように、事件の原因は、アフリカ人留学生が中国人女子学生を辱めたというものであった。だが、かつては第三世界のリーダーとしてアジア・アフリカ諸国民との友好と連帯を誇示した中国で、中国人学生によるアフリカ人学生追放のデモが起こるなどということは考えられないことであった。*TIME* は1963年にアフリカを訪れた亡き周恩来首相がアフリカ諸国民をたたえた言葉を紹介しているが、まったく昔日の感があるといえよう。そのためでもあろうか、今週号の People 欄(pp. 40-41)に出ている、くわえたばこでブリッジに興ずる鄧小平氏の姿はまことにアイロニカルなものであった。

(なかじま みねお/東京外国語大学教授)



アフリカ人学生追放を叫ぶデモ

T I M E

C O N T E N T S



タイムマラソン
 JANUARY 16 1989
 ALC PRESS Inc.

中嶋 嶺雄

- 2 Weekly Survey
- 4 Checklist
- 11 Selected Articles
 - Special Report
 - 11 From God to Man
 —— 神から人間へ、波乱の時代を生きた天皇ヒロヒトの足跡をたどる
 - 14 The Greatest Monarch
 —— 知日家ライシャワーがつづる、天皇制と天皇ヒロヒトの果たした役割
 - World
 - 16 Chemical Reaction
 —— 米軍機によるリビア軍機撃墜事件の真相は？
 - Science
 - 20 Wormholes in the Heavens
 —— タイムマシンにもなる「宇宙の虫食い穴」を知っていますか
 - Business
 - 22 Battle for the Future
 —— 米国 vs 日本——ハイテク開発競争に勝利するのはどちら？
 - 25 Why the Beef over Hormones?
 —— ホルモン使用の安全性をめぐる論争で、米欧経済戦争が激化
 - Health & Fitness
 - 27 New Perils of the Pill?
 —— ビルは乳がんを誘発する恐れあり、と新たな研究報告
 - Profile
 - 28 SYMBOL OF THE '80s
 —— 若くして財を成したドナルド・トランプとは？
 - Food
 - 32 A Fishy Deal in the Freezer
 —— 日本の「まがいの食品」が米国で大流行
 - Art
 - 33 The Passing of a Purist
 —— 現代抽象彫刻の泰斗、イサム・ノグチを回顧
 - 36 実践講座
 In Search of Answers
 —— バンナム機爆破の真相は依然闇の中
 - 37 TIME Commentary

Politics 米国とPLOの直接対話
 Economy 1989年米経済の行方
 Society 米国の性表現規制

角田正美
 坂本弘樹
 板坂 元

S C O P E